新しいくすりの選び方・オーダーメイド医療

「手ごころを加える。手加減する」という意味の「匙加減（さじ）」という言葉があります。料理の味付けを調整するという意味でも使われますが、もともとは医師（又は薬師（くすし））が薬を調合するときに、患者さんの体格や年齢、病状などに合わせて、薬匙を使って薬の種類と量を微調整していたことが語源と言われています。

薬を選ぶ時、現在の医療では、病気を中心に考え、病気の原因を探し出し、その治療をすることを目的としています。しかし病気の状態は個々で千差万別であり、同じ病気であっても同じ治療法を適用することが必ずしも正しくないことは以前より知られていました。しかし一方でそのような治療効果の個人差は治療と効果を長い期間確認していかなければ分からないものであり、個々に最適な治療計画を行うことは難しいとされてきました。

近年では、ヒトゲノム計画によるヒトの遺伝子配列の解読や個々人で異なる遺伝子の特定などによる大量の情報を瞬時に取得できる技術の発達によって、個人が他人とどのように異なるかを観測できるようになってきました。そこでこれらの情報を利用して、患者個人に最適な治療方法を計画することをオーダーメイド医療といいます。

例として、肺、消化器、婦人科領域などの幅広いがんに対して効果のあるイリノテカン塩酸塩は、ＵＧＴ（UDPグルクロン酸転移酵素）といわれる薬の毒性を減らす酵素の強さによって副作用のあらわれ方が変わってきます。この酵素の強さは遺伝子によって決められているので、検査をすることで副作用の予想をすることができ、検査結果をもとに治療方針を決めることが勧められています。

今後は、多くの薬で、個々の患者に有効であるかどうか、あるいは投薬量や副作用について見積もることができ、どの治療薬を用いるのが適切か、どの程度の投与を行うかという「匙加減」ができるようになると期待されます。

大和市立病院　薬剤科　計良 貴之